

博物館 Dictionary No.247

～あなたに語る・時代を超えて生きる心～

展示中の作品について、研究員がわかりやすく解説します。

あんじゅ ずしおう
安寿と厨子王
—山椒大夫のおはなし—

みなさんは、『山椒大夫』というお話を知っていますか？ 悪い人買いにだまされ、母と生き分かれた姉弟の、苦難の物語です。

筑紫国（いまの福岡県）に行ったきり帰らない父を訪ねて、岩代国（いまの福島県）を出た親子は、途中の直江津（いまの新潟県）で人買いの手にかかり、母は佐渡へ、姉弟は丹後国（いまの京都府）へ奴隷として売られてしまいます。

姉の名は安寿、弟は厨子王といいました。二人は、山椒大夫という長者のもとで奴隷として働かされることになります。来る日も来る日も、安寿は浜へ出て潮汲み（塩を作るために海水を汲む仕事）を、厨子王は山に入って柴刈り（薪にするため木の枝などを刈り取ったりする仕事）をして暮らしていました。



ずしおうまる ほりい こうは
図1 対王丸 堀井香坡筆 昭和5年（1930）京都国立博物館蔵（白寿斎コレクション）

そんなある日、二人で一緒に柴刈りに出ることを願い出た安寿の手引きによって、厨子王は山椒大夫のもとを逃れることに成功します。

お守りとしていた地藏菩薩の助けもあって、京都にのぼった厨子王はやがて正道と名乗り、丹後国を治める国守に任じられます。果たして、正道（厨子王）は父や母と再会することができるのでしょうか。そして、安寿の運命は？

この『山椒大夫』の物語は、『舞姫』などの作者としても知られる森鷗外(1862～1922)が、大正4年(1915)に発表したものです。作家としてだけでなく、陸軍の医師としても有名だった鷗外は、のちに帝室博物館総長（現在の東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館をまとめる役職）をつとめた人物でもあります。

鷗外の『山椒大夫』には、もともになったお話があります。古くから語り継がれてきた「さんせう太夫」（「山莊太夫」などとも表記します）というお話で、歌舞伎などでも演じられ、浮世絵に描かれたりもしました。両者はよく似たお話ですが、色々と違う点もあります。興味のある人は、岩崎武夫『さんせう太夫考—中世の説教語り—』（平凡社、1994年）などを読んでみてください。

『山椒大夫』は、戦前から学校の教科書に取り上げられ、戦後には映画化（溝口健二監督）もされるなど、たいへん広く普及しました。堀井香坡（1897～1990）が「対王丸」（図1）を描いたのも、鷗外の小説に影響されてのことでしょう（対王丸というのは厨子王のことです）。

棒を手にとった姿は、裸足ではあるものの、小綺麗な着物を身に付けていて、とても奴隷には見えません。ですが、足元に籠が置かれているので、やはり山椒大夫のもとで柴刈りをしている姿だとわかります。籠に入っているのは、ツツジの花。頭上に枝を伸ばす藤の花も、季節が春であることを告げています。たぶん、安寿に説得されて脱出を決意した場面なのでしょう。

厨子王の脱出場面は、「さんせう太夫」では1月、『山椒大夫』では3～4月頃（スミレの咲く頃）となっているので、やはり『山椒大夫』にもとづく描写だということがわかります。

こんなふうに絵を見ていると、そのもとになった『山椒大夫』も読んでみたくなりませんか？ 博物館に展示されている作品は、まだ知らない世界へとみなさんをいざなう、扉のような存在でもあるのです。

（美術室 福士雄也）